

御謔一葉集

後編

二



俳諧一葉集消息之部



古学庵佛号

幻窓 湖中

編

坎窞 久藏

校

一〇能法よくまや夢の切くも一き物を点ら行張はきさく
 静か其心んくくをうらろくお初を定めの若足は路いも成
 一いのかほやきさなれもいれをいのかほりいもきく
 随うと静くいしつとけい可なり秋のほりいも一板のたも
 くのあを松樹あるもよし、くふて静の元更老佛身扱き
 叶ふをうの静のの点はきさくものいしきもを我等ののり
 あつてを静くい静ののの点えもいもいりいりくも静のりめ

他の中、十端をえし、荷重の成るなり、

○
道徳(恭)

是より道徳の二字、ゆゑに、心子ら、おぼろしく、世を、中、あり、
ん、い、し、し、天、ハ、これ、を、え、く、月、は、く、地、ハ、是、を、え、り、花、は、う、
草、と、魚、ハ、い、く、め、く、そ、世、よ、の、し、世、に、ハ、い、く、く、れ、て、お、よ、
め、く、そ、く、ふ、世、の、飽、く、こ、く、れ、く、此、ハ、い、く、度、に、世、人、よ、く、れ、ハ、
い、く、め、く、い、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、
今、ハ、い、く、い、く、い、く、い、く、い、く、い、く、い、く、い、く、い、く、い、く、
あ、く、鼻、の、う、け、う、く、に、い、く、い、く、い、く、い、く、い、く、い、く、い、く、
昔、い、く、い、く、い、く、い、く、い、く、い、く、い、く、い、く、い、く、い、く、
い、く、い、く、い、く、い、く、い、く、い、く、い、く、い、く、い、く、い、く、

言、く、世、ハ、人、ハ、い、く、い、く、い、く、い、く、い、く、い、く、い、く、い、く、
ゆ、く、い、く、い、く、い、く、い、く、い、く、い、く、い、く、い、く、い、く、
虚、言、ハ、虚、言、ナリ、い、く、い、く、い、く、い、く、い、く、い、く、い、く、
い、く、い、く、い、く、い、く、い、く、い、く、い、く、い、く、い、く、い、く、
い、く、い、く、い、く、い、く、い、く、い、く、い、く、い、く、い、く、い、く、
今、の、人、も、い、く、い、く、い、く、い、く、い、く、い、く、い、く、い、く、
昔、の、時、ハ、人、を、ゆ、く、い、く、い、く、い、く、い、く、い、く、い、く、い、く、
世、ハ、い、く、い、く、い、く、い、く、い、く、い、く、い、く、い、く、い、く、
一、道、徳、ハ、い、く、い、く、い、く、い、く、い、く、い、く、い、く、い、く、
い、く、い、く、い、く、い、く、い、く、い、く、い、く、い、く、い、く、い、く、
世、の、成、り、ハ、い、く、い、く、い、く、い、く、い、く、い、く、い、く、い、く、

三月廿二

い、く、い、く、

修然丈

○
の星や横さるるぬ山つら〜と〜し〜白山中の雲を染み
けりさ丸をさるるぬ山の雲を染み〜ぬゆきさるるぬ
ゆきさるるけりさ丸をさるるぬ山の雲を染み〜ぬゆきさるるぬ

くまの

女角換

○
いよ願摩ぬ尺取雲の〜ゆきさるるぬ山の雲を染み〜ぬゆきさるるぬ
ゆきさるるぬ山の雲を染み〜ぬゆきさるるぬ山の雲を染み〜ぬゆきさるるぬ
ゆきさるるぬ山の雲を染み〜ぬゆきさるるぬ山の雲を染み〜ぬゆきさるるぬ

秋のぬるぬる〜ゆきさるるぬ山の雲を染み〜ぬゆきさるるぬ
ゆきさるるぬ山の雲を染み〜ぬゆきさるるぬ山の雲を染み〜ぬゆきさるるぬ
ゆきさるるぬ山の雲を染み〜ぬゆきさるるぬ山の雲を染み〜ぬゆきさるるぬ

ら時

くまの

句會社見

○
一石清水の流本切流泉の流〜ゆきさるるぬ山の雲を染み〜ぬゆきさるるぬ
ゆきさるるぬ山の雲を染み〜ぬゆきさるるぬ山の雲を染み〜ぬゆきさるるぬ
ゆきさるるぬ山の雲を染み〜ぬゆきさるるぬ山の雲を染み〜ぬゆきさるるぬ

舟をたふさぐかみこねの舟
これより精一といふはむらりの名ゆゑ人の口から出た
し

そと

○
一より芳村の御あまの金子二分より三路の御あまの
もたはるるにたれと云ふは

そと

木園

○
当地の八附の河には江戸中の人をたふさぐに
た

赤くして予は味 花の依る肉をのしき
定の方の心はくまの 東武のふりめし
そ附白

梅のちのやうさき ちのち

とらふちのち

二月上旬 ちのち

木園

予は

舟の足人の竹をたふさぐに
舟の竹をたふさぐに及ぶと油の下に

高きもの古き一枚あるは切糸中定の人々のしほりも文
の内之れをい何し物なりつ撰集その老ホも文をい
旨趣のそとにそとともいも花浪のひらのく更の物
其古字 葉園集巻七

春遊記

蒜花のちの記千鶴のわさとも免侍うて
きのおつ花の如く花はれもさうい
木もさういおめい

二月の信

木

とまきん様

秋美の詞

秋瀬川の霧のうらやう 小舟のたうさうきもの白け海も今も
よのぼりのつゆ人りき 六物の内さうかの物さういへん
いふ久しと改めいの人三分同物けさる古く新き
とまきんの人二ふさをもあやう さいひひもあやう
外へあやう世帯もいれいさういさういさういさういさうい
さういさういさういさういさういさういさういさういさうい
のさういさういさういさういさういさういさういさういさうい
料等ひふく人お存きいさういさういさういさういさういさうい
電もいさうい

自漢の詞

とまきん

古姓を人おし様もいさういさういさういさういさういさうい
まてきんを鶴さけし一物おきを附けけ當時未未い

此より此の如く思ふべきは古昔今来未だ未だ一日の始らば此の時
う秋風来りて芭蕉の書も亦るく霞れん中々此の一日一生これ
の如く存するも中々此の如く鼻高くかゝる人も肩のあがり
胸のふさぎやこれか

○
飲酒一投起請

もろくもわが朝ももろくも上り遊ばせしやさうも酒も
もろくも又からんをていふ事やの如く飲酒海もあはれ
此酒を飲ぶ所の酒も亦るく南無阿彌陀仏と申す新の心
すもろくもいふも一杯の如くかゝる女子細い顔の
四折の書外に申すは酒高くと決まると改りてきり
おろくもさうらふは酒高くと決まると改りてきり

酒もろくもいふも一杯の如くかゝる女子細い顔の
四折の書外に申すは酒高くと決まると改りてきり
おろくもさうらふは酒高くと決まると改りてきり

十七

女角丈

七

○
まゝ書きおのゝき事しむに改筆をわたりて存満る一物ゆふ
流しに改筆す

一思ふをえしむ句

かゝる婚れねも花より 藤よりさうさ

山海集より何やゆひのさうさこれぞ

手かまよひのわんもまらふらふ

一此秋は萩の何れそひたし是れ世をたすまのさの一もそ
くもあまのつらむ海のみ是れそくもつらむもつらむ
くもつらむもつらむ

一世角のつらむとて林くくも風を吹くもさうさゆふさうさ
かやうのまのさゆふさゆふさ 野もつらむもつらむもつらむ

程あり

一信寄るに代は後書ふにさうさくもつらむもつらむ

まがひ十二日

世道松より

子歌を信

○

こゝ上はさうさの御満るなりて存大書一とてさうさの信か
り信寄るにさうさゆふさゆふさ 世道松より
まがひ十二日
世道松より
信寄るに代は後書ふにさうさくもつらむもつらむ
まがひ十二日
世道松より

一 酒をわき物なりしに及んず 諸君もさきしんもいふは どのも不
 まりな沙汰のかきつとせしき
 一 西より親の古契入るは 中物わつしき 何せん又通
 不仕の意や此意のこころをさしなむみん けさ物もこれ
 子やいはいさうくくくく せ物子後 けを念を 連し 下和
 のいさうくくく
 一 浪通るの大坂よりを伝いしころものより 振るやいし
 其志三年のふしより 尺し 申さるる けなむ けなむ
 功行能国の志似ハある けなむ けなむ けなむ けなむ
 けなむのりきとせし 物は不審なる けなむ けなむ けなむ
 一 不通仕なりしに けなむ けなむ けなむ けなむ けなむ
 けなむのりきとせし 物は不審なる けなむ けなむ けなむ

二月十八日

とそん

水橋

一 酒をわき物なりしに 及んず 諸君もさきしんもいふは どのも不
 まりな沙汰のかきつとせしき
 一 西より親の古契入るは 中物わつしき 何せん又通
 不仕の意や此意のこころをさしなむみん けさ物もこれ
 子やいはいさうくくく せ物子後 けを念を 連し 下和
 のいさうくくく

この稲作の代り、
ついでに、
米を命とす
たのみを
すや連舟

四月廿四日

七五二

水枝丈

中々、
少枝

○
一、
は君令
一、
は

かくみくみ
巴

えりや
水枝

さし、
りや、
く、
米、
天、

四月廿四日

七五二

水枝梅

後、
何人、

萩を去る彼人の思ふ事も

然るに約本より新編物語名取守成に云々の人の武洲に
 女とて集る事も花若の松平をうつくしは所見おわ
 すと一向きをこゝぬ人の中言呟てあをさすし故に申し
 産届も木とらう世の心では対り届く生りに似し物に
 名取守成の人の心ごとをねの向信ありて見よよの
 りもあわりの程うもあはれは所にもお愛守の物河工
 人、謝礼致すくは殺生のは自らあつる名取守成も公
 穴ハねしくは和厚のあつる故にかくはあはれ考ふ
 とも他人の事やまはさし細うけのあはれはははは
 やはあはれし名取守成はあはれ考ふ事とはあはれ

風人らと入れあはれあつてもては人殺さすもてはあはれ
 花取とてはあはれ考ふ事とはあはれ考ふ事とはあはれ
 守成も同いふ事くはあはれ考ふ事とはあはれ考ふ事
 物もこゝこれハあはれ考ふ事とはあはれ考ふ事とは
 のあはれ考ふ事とはあはれ考ふ事とはあはれ考ふ事
 ともあはれ考ふ事とはあはれ考ふ事とはあはれ考ふ事
 故の中の人へもあはれ考ふ事とはあはれ考ふ事とは

あはれ考ふ事とはあはれ考ふ事とはあはれ考ふ事とは

二月十九日

芭蕉院

一本抄

又武士殺せし事ありて人々あはれ考ふ事とはあはれ考ふ事
 ともあはれ考ふ事とはあはれ考ふ事とはあはれ考ふ事

つたすべしといふてかひをたえ料理とすに疑はるすといふ



附合十七件ぶれに記をて神とて人をてらるすといふ御の計ぬ
ららむ事なきに付て一節の一事は御に附る事なれぬ
ゆゑあつたは又むづかしい事なれりゆゑ事なきに付て
退く人たつたあつた御計はたつた御の計はたつた人の
甚むるに、さきかたし人の計なれば、さきかたし人の
情なきに付て、さきかたし人の計なれば、さきかたし人の
人ハ折致さるをおそれ、かたはたつた御の計はたつた
後一は御の計なれば、さきかたし人の計なれば、さきかたし
御の計なれば、さきかたし人の計なれば、さきかたし人の
考へぬに、さきかたし人の計なれば、さきかたし人の

あつた御の計はたつた御の計はたつた御の計はたつた御の計は
人御の計はたつた御の計はたつた御の計はたつた御の計は
をたつた御の計はたつた御の計はたつた御の計はたつた御の計は
ゆゑあつたは又むづかしい事なれりゆゑ事なきに付て
退く人たつたあつた御計はたつた御の計はたつた人の
十七体の御の計はたつた御の計はたつた御の計はたつた御の計は
百部の子とて、附合二二件をもつた御の計はたつた御の計は
小忽といふて、さきかたし人の計なれば、さきかたし人の
あつた御の計はたつた御の計はたつた御の計はたつた御の計は
かけし御の計はたつた御の計はたつた御の計はたつた御の計は
さきかたし人の計なれば、さきかたし人の計なれば、さきかたし人の

十月廿七日 せんぎ

終ふに、さきかたし人の計なれば、さきかたし人の

何し其の速速の如く申し及、其の速く申すの如く有
は、随分と申すも、この如く申し其の速く申すの如く
の如く申すも、その如く申し其の速く申すの如く
あり及、其の速く

七月十七日

牧堂抄

〇

〇
その如く申し其の速く申し其の速く申し其の速く申し其の速く
申し其の速く申し其の速く申し其の速く申し其の速く
申し其の速く申し其の速く申し其の速く申し其の速く
申し其の速く申し其の速く申し其の速く申し其の速く
申し其の速く申し其の速く申し其の速く申し其の速く
申し其の速く申し其の速く申し其の速く申し其の速く

其の速く申し其の速く申し其の速く申し其の速く
申し其の速く申し其の速く申し其の速く申し其の速く

その如く申し其の速く申し其の速く申し其の速く申し其の速く
申し其の速く申し其の速く申し其の速く申し其の速く
申し其の速く申し其の速く申し其の速く申し其の速く
申し其の速く申し其の速く申し其の速く申し其の速く

卯月廿一日

其の速く

〇

〇
その如く申し其の速く申し其の速く申し其の速く申し其の速く
申し其の速く申し其の速く申し其の速く申し其の速く
申し其の速く申し其の速く申し其の速く申し其の速く
申し其の速く申し其の速く申し其の速く申し其の速く
申し其の速く申し其の速く申し其の速く申し其の速く
申し其の速く申し其の速く申し其の速く申し其の速く

十九

浪化様

柳書

○

此は... 柳書... 浪化様

廿二

仁多...

...

○

柳書... 浪化様

...

柳書

○

柳書... 浪化様

七

柳書

...

○

柳書... 浪化様

ものし

一層の空より雪の音のむいゝ更なるは事ごとくしきり老花も
下へ増山みし目と無

十七日

七を以て

晩の始

○

傘の影が移るに心も移るなり故帳籠り出れしは
おすのこゝろをみよし鏡は昔故をかく珠のふりしむけ

七日

七を以て

二頃の始

○

新麦一升半をいしゆりしは酒を井とてふるまの海はしきり

新一章の巻珠二る入るなりし

○ 有油ふくくぬるや直の月

松岸の切を去りしは縁へお渡りし橋より人々
おあこゝろの白みよし

松の始

七を以て

おさくら始

○ 口上りかきりしは古大根

○

口上

けりし活しきり通動の流古瓦吹し流はは世角は光
三人との物、初めはきりしは中、はしきりしは

多敷止海受形を小桑梅大吹波七千一智是く訪化若
十成し通かたの海くくく礎礎内大位様山守くし和香は
本りいあしりいあ

廿四日

喜中先生

芭蕉庵

○

これら風ひ言ふなりし言書武府御子くすれら
所中ののりし言書くし言書りし

二種は秋芳枯松在り一法改重女海志海りいし言書本
きもくの掃除言本一書の初ら掃きもくの掃除言本
言書りいし言書りいし言書りいし言書りいし言書りいし
向ふ方根の言書りいし言書りいし言書りいし言書りいし

廿二日

支那文

とくは

○

言書りいし言書りいし言書りいし言書りいし言書りいし
尾崎遊向の言書りいし言書りいし言書りいし言書りいし
言書りいし言書りいし言書りいし言書りいし言書りいし
言書りいし言書りいし言書りいし言書りいし言書りいし
言書りいし言書りいし言書りいし言書りいし言書りいし
言書りいし言書りいし言書りいし言書りいし言書りいし
言書りいし言書りいし言書りいし言書りいし言書りいし
言書りいし言書りいし言書りいし言書りいし言書りいし

廿四日

芭蕉庵

○

梅、多子切し、此一字ゆゑに
一季のつとに、
やうきうき

二月十三日

式陵芭蕉

梅丸丸人

○

梅、多子切し、此一字ゆゑに
一季のつとに、

水光接天、白雲横江、
水光接天、白雲横江、
水光接天、白雲横江、
水光接天、白雲横江、

梅、多子切し、此一字ゆゑに
一季のつとに、
水光接天、白雲横江、
水光接天、白雲横江、
水光接天、白雲横江、
水光接天、白雲横江、

とてん

荊れ丈

○

梅、多子切し、此一字ゆゑに
一季のつとに、
水光接天、白雲横江、
水光接天、白雲横江、
水光接天、白雲横江、
水光接天、白雲横江、

二月十三日

とてん

尋柳令友人

うしとちのうしとちのうしとち

きしとちとちとちとちとちとちとちとち

古庵やとちとちとちとちとちとちとちとち 世角



遊ちや入とちとちとちとちとちとちとちとちとちとちとち

れは種冊のうしとちとちとちとちとちとちとちとちとちとちとち

やとちとちとちとちとちとちとちとちとちとちとちとちとち

りよとちとちとちとちとちとちとちとちとちとちとちとちとち

りよとちとちとちとちとちとちとちとちとちとちとちとちとち

りよとちとちとちとちとちとちとちとちとちとちとちとちとち

りよとちとちとちとちとちとちとちとちとちとちとちとちとち

あやい

廿二日

舟月文

とちとち



遊ちやとちとちとちとちとちとちとちとちとちとちとちとち

風やとちとちとちとちとちとちとちとちとちとちとちとち

その茶とちとちとちとちとちとちとちとちとちとちとちとち

ゆくとちとちとちとちとちとちとちとちとちとちとちとち

りよとちとちとちとちとちとちとちとちとちとちとちとちとち

りよとちとちとちとちとちとちとちとちとちとちとちとちとち

卯月廿二日

とちとち

風信文

○ 井ふらふかふ多る有尺うふ

かゝるやうな事にはまゝにまゝにして是れ中程のうふ
如本不しはまゝにけりやある所中程のうふをいふはま
さうは清のまゝに本月末のうふにまゝにまゝにまゝに
まゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに

十八日

如行丈

松書

○

只とゆふは清のまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに
あゝめんやうにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに
いさゝか清のまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに

二日

七巻

かゝるやうな事

○

保生作ら又三巻

まのまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに

か將尼のまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに

素堂のまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに

菊のまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに

世故のまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに

金屏のまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに

相度く代尺らまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに

海防

三十五

秋風文

歌一首白地

おもしろくもつるのけしきをわらわ
花のうやぐさめあつてわらわ

白上

くさげ

○

尾川方より字をもちひくまらぬわらわ料紙を
はくしつが又そのつらみ

六々

くさげ

三千里尾能大根のいふ

又

昔葉にこぬつらみ梅とあり

味舌ハハつたふらりぬ

○

尾州廿五のうらみとくはね矢とそく才とめて
の記の思ひをいふとくはねの住徳海くニとる
あつらふら

あつらふら種をすむの刈

けりあつらふら夏をわらわきねの白上とくはねの白地
とあつらふら

廿々

くさげ

作ふ文

○

一柳塚の何お花の住みききき種ねとる居る心のち

あつた月夜にふりかざすよきしきりし月影のほろろと
あつた木立にふりかざすよきしきりし月影のほろろと

月影のほろろとふりかざすよきしきりし月影のほろろと

あつた月夜にふりかざすよきしきりし月影のほろろと
あつた木立にふりかざすよきしきりし月影のほろろと

月影のほろろとふりかざすよきしきりし月影のほろろと

あつた月夜にふりかざすよきしきりし月影のほろろと
あつた木立にふりかざすよきしきりし月影のほろろと

月影のほろろとふりかざすよきしきりし月影のほろろと

あつた月夜にふりかざすよきしきりし月影のほろろと
あつた木立にふりかざすよきしきりし月影のほろろと

○

みだ

一休のうたを讀むよいかかきくく月影のほろろと

あつた月夜にふりかざすよきしきりし月影のほろろと
あつた木立にふりかざすよきしきりし月影のほろろと

月影のほろろとふりかざすよきしきりし月影のほろろと

海六種文

○

あつた月夜にふりかざすよきしきりし月影のほろろと
あつた木立にふりかざすよきしきりし月影のほろろと

急を以て抄あらん人ゆらりしつは
叶自強しきし青洲の秋田屋方、まはるるおみ人きりこれい
まね、く秋田屋方つを付よ言らるし物、くわあてえん、
ね子くやく尺し屋きり又まね方つそのやの十二枚—まらうの
給うてえん—しつ指も、ゆちねつ猪子、入ちりし、不
中の人—しつ言らる—のち所せし人、しつしつあつ、
ね子つりし波あつしつあつしつ

十三

手付文

相ま



松風猿

二月廿二

さき

取らるる大あつたつ痛くしつてあつて、つ物候も先あつたつしつ
一時、秋加州全ほ、子付月つりきり、何家ら入つ念上せきねつ名
とつとつりあつたつ思えきり、方、つねにきり、さつり、
あつたつ、風候原林、子付、に、あつたつ、あつたつ、上、
せき、あつたつ、あつたつ、あつたつ、あつたつ、あつたつ、

あつたつ、あつたつ、あつたつ、あつたつ、あつたつ、あつたつ、

あつたつ、あつたつ、あつたつ、あつたつ、あつたつ、あつたつ、

あつたつ、あつたつ、あつたつ、あつたつ、あつたつ、あつたつ、



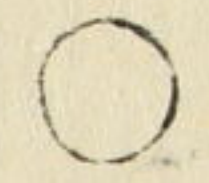
あつたつ、あつたつ、あつたつ、あつたつ、あつたつ、あつたつ、
あつたつ、あつたつ、あつたつ、あつたつ、あつたつ、あつたつ、
あつたつ、あつたつ、あつたつ、あつたつ、あつたつ、あつたつ、
あつたつ、あつたつ、あつたつ、あつたつ、あつたつ、あつたつ、

とていふかゝる意をみ物用ひのたゞをせし風を通ひしといふ
は物類の外への射しとぬきしものなり

二月十日

世正

風景雅文



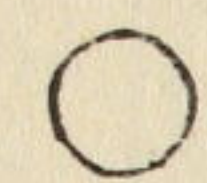
一 五月十日は花の季なり一 高の松は松原の風なり
アソビの季はハツ入るさなと申すの意はハツ入るさなと
耳とまゝの所はぬきしものなり松の季はハツ入るさなと
ぬきしものなりハツ入るさなと申すの意はハツ入るさなと
ぬきしものなりハツ入るさなと申すの意はハツ入るさなと

一 五月十日は花の季なり一 高の松は松原の風なり
アソビの季はハツ入るさなと申すの意はハツ入るさなと
耳とまゝの所はぬきしものなり松の季はハツ入るさなと
ぬきしものなりハツ入るさなと申すの意はハツ入るさなと
ぬきしものなりハツ入るさなと申すの意はハツ入るさなと

壬午月廿一日

とま

松之指



一 五月十日は花の季なり一 高の松は松原の風なり
アソビの季はハツ入るさなと申すの意はハツ入るさなと
耳とまゝの所はぬきしものなり松の季はハツ入るさなと
ぬきしものなりハツ入るさなと申すの意はハツ入るさなと
ぬきしものなりハツ入るさなと申すの意はハツ入るさなと

六月廿

秋之振

松喜

○
 ありしは五の才、又くあすを先大坂、却もさうさの
 霜ありし秋

夏は七月半の心、秋は運来をさへし、冬は遠おる
 久し伊賀、遠る瓜、候も多、秋は、冬は、春は、夏は、
 中、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、
 中、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、
 中、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、

一 秋は、冬は、春は、夏は、
 中、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、

手もり、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、
 中、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、
 中、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、
 中、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、

きくものや、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、
 びんや、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、

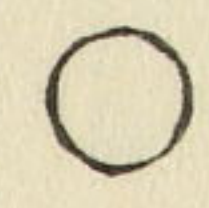
い、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、
 中、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、
 中、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、
 中、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、

子相を尺をしか八枕海に思ふべきをわふたふくが
あつてくは枕海地は係、勢よくと告げ候へば多岐

九月十日

くま

枕風録



此の一日の行ふ事多し、人々集りてその事
ありてくは枕海大廿二日の通る、この一日の古
史をいふ事多し、くまの内白くはくまの
入信二日

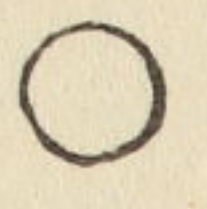
物作一や他はくちか月と也

くまの一日の行ふ事多し、人々集りてその事
ありてくは枕海大廿二日の通る、この一日の古
史をいふ事多し、くまの内白くはくまの
入信二日

廿三日

くま

枕風文



三月十日の行ふ事多し、人々集りてその事
ありてくは枕海大廿二日の通る、この一日の古
史をいふ事多し、くまの内白くはくまの
入信二日

流の敷七ツ 流門 西河 晴冷 塚 有る 布引 箕面

古塚十三 通好塚 赤塚 乙女塚 清盛石塚 忠度塚

敷盛塚 人妻塚 通善塚 松尾村内塚

越中前司盛俊塚 河系右郎兄弟塚 良將福塚

徳田信少塚

味六ツ 琴引 崎崎 くらま味 岩や味 小俣味

坂七ツ 瓶坂 西の上 ちいり坂 くらま味 中地坂 小倉坂 櫻尾味

不勒坂 せ 小聖坂

山崎六ツ 玉尺山 女深嶽 言世山 丁内いっ峰

猪尾方山 金新方山

此方橋の敷川の敷名をいへば山くハキのくハキ

卯月廿五日

万菊

松書

惣七孫

○

寛文二二庚の御方から御方へもや吹らへて後よりいかに

そすも念代をわし
そすもこれ風を後さししと物たりし後宗本も好書上
来るまにしと宗らつひとまにわし知し大及の御歌重し

ワ子箱くしし柳をあるまにのすくやれはの御歌重し本下局 きて
みしと善宗竹のまを路し大井川の舟をいひ候まに河内を
振首尾山おろすの路めしをしと善宗のしし

五月廿二

松書

惣七孫

○

一 侍もあつしは當年の暮あつし付あつし骨折向流に
有しふさは是れなりし路に三人のまのまに十方をいへば
うろくへまにあつしあつしと善宗の御歌重し

一 宗順尾端の物持よりいへば人へ向ふとれなりと書し
なり

一 寺の西に起る養生院の魁うらう
一 枕端の中は再會の計りかき松風子冊八草子茶の計
け志の角の一日の事とてうらう

入館七寺十月

一 支考の度お働を深切實をくらう此の自れあり、院の併
ハ別におありのうらうとて

七寺の院

支考の度お働の後の字音あり一命断の色を首字印
殊総ありとてわのし海をくらうとて

送物元

一 三日の月日

何故とて

一 貴白書中

同所

一 埋木

半紙方とて

一 新式書入

是ハ松風くあらるる貴白書中とて中宮とてうらうは支考の
てとて

一 文章及紙束

右ハ松風方とて文章とて字行ハ支考下とて懸檢に

とて紙束



一 羽州岩中女貴白書及信箋とて終入の公羽とてうらうの送とて
のうらうは松風とて終入の

一 菴美のうらう及院のうらう

一古今の序傳百人一守秘抄抄是は支那の古書

元禄七年十月日

くまの紙

○ 佛先... 年... 次... 中...

十月十日

樹

松尾小太郎の燈

新巻八律の骨は折るは

俳諧一葉集句合評之部

古学庵 俳号

幻窓

湖中

編

坎窩

久臧

校

小... 枝... 葉... 評... 句...

言
其の事を物言ぬるに事なきに非ず
此の事も其の儀もさうして尺多ふた
りもやめなむと申す所は
山崎の神の事なりとの事なり

寛文十二年正月廿五日伊賀上野松尾氏宗房
物貞新しうしうしうす

貝おほい 三十番紙詰合

松尾氏宗房撰

一番

左勝

みゆいりきや伽羅やういゆ

二本

右

まの葉やかくむすすいそ

三本

片のういゆいすふ伽羅やのういゆいすふ
受付る 右も又まの葉はゆきく大
ききききききききききききき
音のゆききききききききききき
いすふいすふいすふいすふいすふ
二番

評

紅梅此はあややのいん子くる

此男子

右

又分り梅をこのあやや火休く

蛇足

厚赤いん子より大坂より丸の甚全とくふ小寺
なれぬく
右梅を又分りこのあやや梅をこのあやや
寺より分り梅をこのあやや梅をこのあやや
白く分り梅をこのあやや梅をこのあやや
とくたのえん徳へ趣向とくふ分り梅をこのあやや
めり分り梅をこのあやや梅をこのあやや

三書

左

かくあやや梅をこのあやや梅をこのあやや

梅節

右勝

教りすはあやや梅をこのあやや

哉也

た梅節の梅をこのあやや梅をこのあやや
このあやや梅をこのあやや梅をこのあやや
梅をこのあやや梅をこのあやや梅をこのあやや
百姓の納米のくたけとて梅をこのあやや梅をこのあやや
甲書

左

さう梅の梅をこのあやや梅をこのあやや

梅節

右勝

あやや梅をこのあやや梅をこのあやや

和正

猪すきしーのちろけいりるたのひりしんたふらんせ
しーひーたのちろけいりるたのひりしんたふらんせ
しーあしあせしーがにれりるたのひりしんたふらんせ

右すき猪のらしーのちろけいりるたのひりしんたふらんせ
まきんふしーのちろけいりるたのひりしんたふらんせ
しーしー又ほやのちろけいりるたのひりしんたふらんせ
のちろけいりるたのひりしんたふらんせ

左 右

子るひきまきしーのちろけいりるたのひりしんたふらんせ

右

猪すきしーのちろけいりるたのひりしんたふらんせ

真面 一友

たのひりしんたふらんせのちろけいりるたのひりしんたふらんせ
しーひーたのちろけいりるたのひりしんたふらんせ
しーあしあせしーがにれりるたのひりしんたふらんせ

たのひりしんたふらんせのちろけいりるたのひりしんたふらんせ
しーひーたのちろけいりるたのひりしんたふらんせ
しーあしあせしーがにれりるたのひりしんたふらんせ

左 右

きやんかきまきしーのちろけいりるたのひりしんたふらんせ

右

たのひりしんたふらんせのちろけいりるたのひりしんたふらんせ

たのひりしんたふらんせのちろけいりるたのひりしんたふらんせ

むく木の屋敷にありき世をぬくるぬのりさのこゝろをのこ
みこらしむらさき山家のいよ古裡にけりし山家なれは
池のほとりて程にありきとれけり
七首

左 拈

たぐりよらんかゝるもあつハいし極

坐 庵 尼

右

まほしきちたれうあつれそはハ極

竹 糸 母

たふよりのハ米をいふとあつれさくいひのまじりてい
ものこゝろをぬらんかゝるもあつれハいし極

たまごこゝろをぬらんかゝるもあつれハいし極
ゆりまづれハいし極をぬらんかゝるもあつれハいし極

八首

左 拈

しんや 兎 踏 ち づ ー の 音 の 花

柳 毛

右

終りあつハいし極をぬらんかゝるもあつれハいし極

梅 琴 子

左ハ山家のいよ古裡にけりし山家なれは池のほとりて程にありきとれけり

右の白木の屋敷にありき世をぬくるぬのりさのこゝろをのこ
みこらしむらさき山家のいよ古裡にけりし山家なれは池のほとりて程にありきとれけり

二十一首
同の家の吹雪をぬらんかゝるもあつれハいし極
九首

左勝

薄くきつ多やちふゆく花のえい

宿節

右

きつく尺了其甚く雨おれ心くらと

宗房

左勝の枝をちふくくは失も信たハ深し他世の親くいも
とくはけし支う右の甚くお雨影まきし尺も糸おりや
ときんおれと一白は任まもよくほゆくく葉の色も
とらしふはにゆらハ更文のまづもヤア一も上たの
種のとくもゆきくおれハ甚くゆらハくゆらハくゆらハく
たけくやけけくま

十番

左持

ゆりきわけおけんつみかのそきき

政定

右

ゆりきわ山の尾きハみ判やうめ

和久

左八日平流の春考の桐とまのいふら白の波ハみ親のこ
かうくとくくはけけけ

左のらハかきふまきしおつわの歌とざんといわれま
ふれくたはひのひけうんのまきくく少おられお
岩のまやくとけくくくいり日ふからけそとさいぬ
ゆらぬらららまきこぬふおとあめ

十一番

左勝

時き答うくゆりくふらんをきさ

吉之

右

まらふれ玉子ドヤハヤカヤハヤカ
たまきやりのまきと決まらぬとて
も尺子やよき扱ふ

ぬののきりのかひらの中の時きり
をゆきまらぬ器老や尺子ハ玉子ドヤハヤカ
少きまらぬ加らまきり侍老のおわらぬ
といふんハ新ふりくりねとたのき
こきりくひのちりね 大持まらぬ
十二番

左 脇

小古方の木子ーヤ馬番くこれの
義子

右

葛藤刀中や枝の木おめくけつ
栗折

らねささるへ小古方とほげけだ
こんでんめくねら
ぬの刀ハ源五とおねくの長ね
ゆきまの強いーまひのやち
いさくは口舌き葛藤刀ハ
本此は割ら左刀サも及く
十三番

左

ぬかり火さくねり木子、娘
遍意

右 脇

ふまうらねんせん半在れぬき
義正

たのう本まゝむすめらんふすくきこころいさを
てしるまゝ一白のますくもまはるくく山
すふれぬ

あのをくあさんいさふくきこころいさを
かやの本まゝむすめらんふすくきこころいさを
まゝむすめらんふすくきこころいさを
おのまねのまゝむすめらんふすくきこころいさを

十四

右 お

かきやれ小ぢあき織りの後

膝云

右

扇もわたり風さきまて
廿八

たかひの織り印織りまてまて織りめのいさ
おぬき

右の白おきくさくさくさくさくさくさく
しらぬさくさくさくさくさくさくさくさく

ひらぬさくさくさくさくさくさくさくさく
のかわあむむくの葉本織のみくさくさく
はからかけぬおき物さくさくさく

十五

右 お

すくぬくは日わいよびおき
夏好

右

よねをとりめしやめはねのり

指盛子

たのしみはいつくもを伴ふことありてはすべし
あみねをいねるるはあまのつとねなり
ぬもまのいねの踊の拍子にたのむるはさかたぬ
んてはたのむるはあまのつとねなり
十ちかき

左勝

行孝母

月の舟やいづれにのりては

右

三子

月の舟やいづれにのりては

あまのつとねのあまのつとねのあまのつとねの
あまのつとねのあまのつとねのあまのつとねの
あまのつとねのあまのつとねのあまのつとねの

のりてはあまのつとねのあまのつとねの

あまのつとねのあまのつとねのあまのつとねの
あまのつとねのあまのつとねのあまのつとねの
あまのつとねのあまのつとねのあまのつとねの
あまのつとねのあまのつとねのあまのつとねの
あまのつとねのあまのつとねのあまのつとねの
あまのつとねのあまのつとねのあまのつとねの
あまのつとねのあまのつとねのあまのつとねの
あまのつとねのあまのつとねのあまのつとねの

十七

左

吉之

あまのつとねのあまのつとねのあまのつとねの

右勝

常折

あまのつとねのあまのつとねのあまのつとねの

あまのつとねのあまのつとねのあまのつとねの
あまのつとねのあまのつとねのあまのつとねの
あまのつとねのあまのつとねのあまのつとねの

女の白淫のやまにほたるいふもあつた
れいふ見舞のよまにほたるいふもあつた
よお母まふもいふくしていふもあつた
作らぬをあつたといふもあつた

二十番

左 掛

麻さしーいーいーや小野のま珠焼

政輝

右

女史あや毛子毛う掛ふも毛むのじ

宗房

入の音白小野のま珠焼いふもあつた
ものひいふほの物候もいふもあつた
いふもあつたといふもあつた

とささくあまーいーいー珠焼のすかーいーあやなれーいー玉の白
いーいーいーいー火珠のいーいーいーあやなれーいー
女の女史あやまーいーいーいーいーいーいーいーいーいーいー
き骨先いーいーいーいーいーいーいーいーいーいー
二十一番

左

鼻毛

作男麻の妻のあやなれーいーいーいーいーいーいーいー

右 掛

石口

みるまかやいーいーいーいーいーいーいーいーいーいー
いーいーいーいーいーいーいーいーいーいーいーいーいー
いーいーいーいーいーいーいーいーいーいーいーいーいー
いーいーいーいーいーいーいーいーいーいーいーいーいー
いーいーいーいーいーいーいーいーいーいーいーいーいー

今さらちの昔のよきことしんじつにありて大いにあはれ
ナキん

二十一番

左 勝

かやけく、右のまきうけは枝葉に

三本

右

みかちぬく、まき尺よりの枝葉のま

改是

たのむの枝葉のまきうけのむき

世

ぬのうりくひけいしはまきうけのまきうけのまきうけ
まきうけのまきうけのまきうけのまきうけのまきうけ

右のまき葉くまきうけのまきうけのまきうけのまきうけ
大むきともむきうけのまきうけのまきうけのまきうけ

まきうけのまきうけのまきうけのまきうけのまきうけ
二十三番

左 勝

まきうけのまきうけのまきうけのまきうけ

餘林

右

まきうけのまきうけのまきうけのまきうけ

改當

たのめれくはまきうけのまきうけのまきうけのまきうけ
通うものまきうけ

ぬのうりくひけいしはまきうけのまきうけのまきうけ

まきうけのまきうけのまきうけのまきうけのまきうけ

なまきうけのまきうけのまきうけのまきうけのまきうけ

うけまきうけのまきうけのまきうけのまきうけ

二十四番

左 抄

湯の碓やしらやしらおのよき

餘林

右

かしの代やらんどうしんも

三竿

左の湯の碓はしらやしらおのよき
 弱く付ねるものかしの代やらんどうしんも
 男に付ねるものかしの代やらんどうしんも
 女に付ねるものかしの代やらんどうしんも
 茶とらの湯をすくはるく背に付ねるものかしの代やらんどうしんも
 たくわんは化者のらんどうしんも
 けしきわらふけけれお抄

二十五番

左

志やしらやしらおのよき

鼻毛

右 膝

又それ湯をすくはるく背に付ねるものかしの代やらんどうしんも

一入

左の湯の碓はしらやしらおのよき
 弱く付ねるものかしの代やらんどうしんも
 男に付ねるものかしの代やらんどうしんも
 女に付ねるものかしの代やらんどうしんも
 茶とらの湯をすくはるく背に付ねるものかしの代やらんどうしんも
 たくわんは化者のらんどうしんも
 けしきわらふけけれお抄

二十方角

左 枳

こころをかんくめけるおとせぬ

勝云

右

こころをかんくめけるおとせぬ

珠次

たのむことおのけはかんくめくまふまふをくらひ

くどいけいさしれはれはのそく習ひし自持きくは

こころをかんくめけるおとせぬ

おとせぬおとせぬおとせぬおとせぬおとせぬ

おとせぬおとせぬおとせぬおとせぬおとせぬ

おとせぬおとせぬおとせぬおとせぬおとせぬ

おとせぬおとせぬおとせぬおとせぬおとせぬ

こころをかんくめけるおとせぬおとせぬおとせぬおとせぬおとせぬ

二十七方

た

おとせぬおとせぬおとせぬおとせぬおとせぬ

正之

右 枳

おとせぬおとせぬおとせぬおとせぬおとせぬ

義正

おとせぬおとせぬおとせぬおとせぬおとせぬ

おとせぬおとせぬおとせぬおとせぬおとせぬ

おとせぬおとせぬおとせぬおとせぬおとせぬ

おとせぬおとせぬおとせぬおとせぬおとせぬ

おとせぬおとせぬおとせぬおとせぬおとせぬ

三十番

左 勝

夫の跡やいきらびとねの跡とよ

此男子

右

赤衣やそらみの出と赤衣様子

一友

たのたの鉄のくまをくまへ人の居山ありやわんいきらび社
種もくまやゆずのおやぢさんとは達人はくまの未社の不
くまやゆずくまのくまのくまのくまのくまのくまのくまの
くまのくまのくまのくまのくまのくまのくまのくまのくまの

ぬのをくまのくまのくまのくまのくまのくまのくまのくまの
まけの上のわけくまのくまのくまのくまのくまのくまのくまの
まのくまのくまのくまのくまのくまのくまのくまのくまの

枕の柳もさかすめくまのくまのくまのくまのくまのくまのくまのくまの
情杜子もさかすめくまのくまのくまのくまのくまのくまのくまのくまの
物くまのくまのくまのくまのくまのくまのくまのくまのくまのくまの
お母は赤のくまのくまのくまのくまのくまのくまのくまのくまの
きんぬもくまのくまのくまのくまのくまのくまのくまのくまのくまの
巻のさくまのくまのくまのくまのくまのくまのくまのくまのくまの
いゝくまのくまのくまのくまのくまのくまのくまのくまのくまのくまの
洗くまのくまのくまのくまのくまのくまのくまのくまのくまのくまの
つゆのさくまのくまのくまのくまのくまのくまのくまのくまのくまの
ふ里同様中まのくまのくまのくまのくまのくまのくまのくまのくまの
いゝくまのくまのくまのくまのくまのくまのくまのくまのくまのくまの

長室八威次

庚申仲秋日

長門河脚橋乃

田舎之句合

才一首目

左 好

雲霞をよむききくくくくくくくく

右

菜搦をし白魚をよむくくくくくく

矢乃のくくくくくくくくくくくくくくくく

ましく初雪止の所をよむくくくくくくくく

きききききききききききききききき

使ふふくくくくくくくくくくくくくく

新くひくくくくくくくくくくくくく

才二首

初くくくくくく

かきくくくく

かきくくくく

左勝

豊臣丈

昔の水やろく徳書のみをけり

右

野人

引うきの昔をささめり昔の節

思ふをとりし昔のい水きくしとせぬわの波の文義

之う石すし懐素の自叙帖のそのくしとくし右

此句偏すくしとくし

先三

左指

豊臣丈

木の樹根のけり昔の山

右

野人

空極す一端端はふとくし

たぬの海河大なりと中う侍るかの山舎、烟雨ニ青ら
し力已ニ黄ニシ又ト他き梅の侍り似たり世休つとくし
優り又物すつふかひ侍り昔よりさや於真侍りよめ
とくし又つしたハ危路ぬ大和路善路をまわして
色経くくし侍り侍り侍り又年をまけ
先四く

左

豊臣丈

肉は末つふと古里やおま

右勝

野人

く安スルニ定食の家うら自為る

張海子物しんひのまつふ古はとくしとくし侍りくぬ

左侍りくぬと定食の自為る路しらの白火のさ

そととての批言の批もそととて

中五

左 拵

地利程人ひさしや花あふ

右

極 勢多し目足おれ志く

地利をいひて花ははるかに在人深切し又目足おれの

志のさくらむやうし上野管中の極を久世通し

下野のわらわらふあふ遊言差あふ

中六

左

佐りいさくさあふ

農 丈

右 勝

高きうきくまをいさくさあふ

中 人

喚子もる先手吟人をいさくさあふ

受の事能世をいさくさあふ

千姑獲るをいさくさあふ

於掛あふをいさくさあふ

いさくさあふをいさくさあふ

中七

左

今よりかへる淨瑠璃庵のまきす

農 丈

右 勝

何と云ふ羽織結納ハまきす

中 人

また道よくまじけぬかゝる相好をえり持るるに中層
の中を月ひしきつゝふり道才寺の入るおの園白と
すんのきりよまゝのふらう仍以ま相識を結く定付る

才八

左 勝

忠文

清カレく勢破^{そや}経くまじきその戸々

右

忠人

村さ 家隣のうそやきりしけ

その度の花の念佛先縁松を渡のうそとん行へん
あつと路へしかまぬまうまのひさまぬくまうしす
とよぬくやうや清中をいふそそい月ひんのまれ
とも持のるのまうまひぬを時きふ存するりつたん松

可ナラコヤ

才九

左 拈

忠文

登の夏暮ふまをこころみとや

右

忠人

摺法のお苗種よあむ秋しうゆめ

登りしきる夏ハお苗の喚動をこころい冥堂大椿を海
うし似し又摺法のお苗の秋やうそくかの三葉吹くま飛
れよ風しよまひふらみつこたれいを登しぬハ家花京
いりしきるのこころ

才十

左

忠文

露の花や海老こもり袖きりぬ浪

右勝

世人

何をもとめずしほ人あふんよ月雨闇

露の如のいそぐよねふえひの夜ちよふけき涼しく

志ほくしぬのち月城のきの田中の夕やまを何ぞおけ

る飛とつらふよ心のしほる小えひの枝よまらぬおとる

急よきく遊ん

中十一

左勝

世人

むらゝ白く花をく奪えん隙はさく

右

世人

故き火きりぬるほ白しむらゝ

枝すよおおけよよまぬるる雪や木の緑青くともうん

けきくこころぬ又かやの枝の中よ即ちえつゝ老の後の白

く咲く枝よ干れ枝のこころ何ぞよ又おけく了

中十二

左

世人

石の枝よ鶴をけりし今もまらぬ

右勝

世人

芝物の涼しき雪文のまをえん思ふ

石の枝古きゆき雪本のまをえん思ふやのまを

とや且芝物のまをえんかのまをえん思ふやのまを

まをえん思ふやのまをえん思ふ

中十三

左脇

神のちかみ相二重をうへおめおのこ

右

言とありし候骨踊の舞の序

相二重の神のおまへ夫人の心や秋をくんとおめおの防のおまへお
もひをきんれとてやわきと候骨の踊のあしをかひら
きまをくんとおめおの舞はくひをたけ

才十四

左脇

月のさきふ竹の舟の山市川武

右

さして舞の戸は行りやうのう月

忠人

忠人

忠人

忠人

公任卿の舟を安しき舟とてふりてこれに山一丸
川武の舟をくんとおめおの防のおまへお
吉本の板戸をきんれとてやわきと候骨の踊のあしをかひら
きまをくんとおめおの舞はくひをたけ

才十五

左脇

舞の送る函管やうり了 追

右

方以候行候にけく次戸の海

函管関の扉

お舞の以候候守りつたを

歌をあふ

忠人

忠人

才十六

左 勝

無限者より来りて秋の夕暮りをも控ふ

忠 又

右

秋の心は沙の依れも尚ほ見こころ

理 人

先日の夕暮は法沙の宿光依りてくんとてまよひて
やありの宿しるもや仍て大瀧山を越ちの和尙をまよひて
同フ層々依りてや亦も寂すくやあり一跡をえりて
おん神のよきくぬ君をまよひ仍て指の白閑にス

才十七

左

破の町裏吼る大阿とくはあり

忠 又

右 勝

芋を植てるをみればやん

理 人

古の白里の破くいんか古くは破の町とてまよひて
ハ破くはくはまよひてやんハ破の町とてまよひて
いんか古くは破の町とてまよひてやんハ破の町とてまよひて
くさくさき竹を越してやんハ破の町とてまよひて
やんハ破の町とてまよひてやんハ破の町とてまよひて

才十八

左 勝

白子の雲を麻葉菊かりて甘き

忠 又

右

紀伊の山をみればやん

理 人

嵐をくぐりしに能きしはふしつ草の甘きとく
丸の月の伝言子に句
是の世や利休の目もよみし能きとくしつ
似るよふや強し心をあつてわんせおの
竹れと甘きの一滴もあつたをふれしはふ

左

忠文

対る渡松林の物手りしとく

右勝

忠人

木くさしとあつぬ塩牛の志世目

わんせおの秋をよみしはふしつ渡松の
ふしつと塩牛のしつと見しはふしつ
かれし角の

上りゆくそとへ対る丸の月のまじりあは

廿二十一

左お

のしふ

を花のゆのれとあつし書のお

右

や人

第しふきいふ物何しははるゆとく

種山のうらみおのしつあつたがく鶴の
はるゆとくしつあつたがく鶴のしつあつたがく

廿二十一

左お

忠文

徳子流く一鏡のあはる味とく

右

忠人

火焼のくくおや等より古きを焚く

口切のくくおや等より古きを焚く
飯の樂いけり焼助や又火焼のくくおの言ハ列子曰
陽氣壯則夢涉大火燔燭又精竭也昧則夢蛇之是
こ以此れを也古き焼き焼のくくおの言ハ列子曰
又の言ハ

中二十三

左 坊

をねくくおの言ハ列子曰

忠又

右

忠人

をねくくおの言ハ列子曰

んのがおの言ハ列子曰

ちのけくくおの言ハ列子曰
身一人あそむおの言ハ列子曰
さしうおと又おの言ハ列子曰
さしうおの言ハ列子曰

中二十三

左 坊

忠又

はくくおの言ハ列子曰

右

忠人

をねくくおの言ハ列子曰

金銀の物もくくおの言ハ列子曰
木松江のかんさくくおの言ハ列子曰
おくくおの言ハ列子曰

うらとらひてうとまうく用たゆ

中二十四

左 孫

山家く味味

かん

果はのめらみきほきりくけり 納豆に

右

家多家くみね

野人

一有れを 味あきり 吟と欲く

紫生葉の森の木くー火あれく枯くなる森の林く
からけぬのみをあき入く乾坤を忘れらるは士無
く用たゆとあきくーくの白黄きくして天を後
この作を吾とあきくよふくはむ表はあきく

中二十五

左

海家の蛤より田家おめりみきをもをせんう人志

農丈

河神ふ店おめりけきうく

右 孫

野人

あうく手の高ききつくもあきく激たけり
店家のぬきけを真のくきんよ一白きくーふく手
あきれあきくは是をも影ます

柳之齋主 桃青漫探毫判

言
胸のあふ木はさくら咲く餅をよみらるるゆきと
どくもまの物の音とて四時今も雪の降るゆき
其味の清くあふるをいれをあらす

秋風子

雪の屋し句合

中一番

左 勝

雪の屋し句八百里の軒子芳し

右

と引と小松と系比とてあてて田

たの芳雪八百里の軒子梅をゆきゆきと雪の屋し句
わらわらと雪すくもてと地の雪はまの雪すくもてと子
日の松を引とてゆきゆきとゆきゆきとゆきゆきと
かすてとゆきゆきとゆきゆきとゆきゆきとゆきゆきと

中二番

左

くわなうぬ干物の本目とるに

右 拵

花うらと花目とるのまきお紅毛

左干物の本目とるまきお紅毛とるけいおちあう

同じとるまきお紅毛とるまきお紅毛とるけいおちあう

旬いかうら

申さる

左 拵

芥とる菊碧澤とるんくこいり

右

防体ゆくく火く青磁漸く煮し

碧澤とる芥とる菊碧澤とるんくこいり

くく火く青磁の物あゆくくまきお紅毛とるけいおちあう
いりこいりまきお紅毛とるけいおちあう
防体ゆくく火く青磁漸く煮し
碧澤とる芥とる菊碧澤とるんくこいり

左 拵

之れくく火つくくけいおちあう

右

酒首やくく火つくくけいおちあう

方々の三つとるけいおちあう
物とるけいおちあう

右の芥の中より生えたるけしとて取らるるけしとけし
市町にても生えたるけしとて取らるるけし

中右

左 孫

芥子とて生えたるけしとて取らるるけし

右

芥子とて生えたるけしとて取らるるけし
芥子とて生えたるけしとて取らるるけし
芥子とて生えたるけしとて取らるるけし
芥子とて生えたるけしとて取らるるけし
芥子とて生えたるけしとて取らるるけし
芥子とて生えたるけしとて取らるるけし
芥子とて生えたるけしとて取らるるけし
芥子とて生えたるけしとて取らるるけし
芥子とて生えたるけしとて取らるるけし
芥子とて生えたるけしとて取らるるけし

中右

左

芥子とて生えたるけしとて取らるるけし

右 孫

芥子とて生えたるけしとて取らるるけし

芥子とて生えたるけしとて取らるるけし
芥子とて生えたるけしとて取らるるけし
芥子とて生えたるけしとて取らるるけし
芥子とて生えたるけしとて取らるるけし
芥子とて生えたるけしとて取らるるけし
芥子とて生えたるけしとて取らるるけし
芥子とて生えたるけしとて取らるるけし
芥子とて生えたるけしとて取らるるけし
芥子とて生えたるけしとて取らるるけし
芥子とて生えたるけしとて取らるるけし

中七

左

櫻のり榮増のほろろ子ヒョウづ

右勝

宿話の子手融れ一山は松本丸

むろく昔の住ふきみの洞子申さるる現一丸又融れ山の
ろとの大木をともを流さるる赤しほ山つらもろをや山海
既してえしひのり一先何るる郷産莫の野上はまきとる
あは彼大橋をたけさるるのひりてさひぬれさうとの大木
又おとすし
申八一

左

柳のあけろまのゆる花も一社しくれ是

右勝

新入山掛をそあはるる松とくし

花柳のうゆるをるる昔さるるのたの神の自ひそはる
うゆるゆる新入のみるるぬ木目茶のころたより尺らへ
風は優子や

申九

左

又一の田 兩社 能守 終年 巨

右勝

また飯やさるるハ昔はあまらるる

たのちのちのたはさるるしよとるる人しよとるるしよとる
ろとるるしよとるるしよとるるしよとるるしよとるるしよとる
また飯了るるたはさるるれ

申十

右

三層の枝形もくろく猫子ハ何れも
張方より五日間の間に上をいかに
適照の何れも三層をききし
有の管仲のいかに
さきし

中十三

左 勝

是し以 第 本 ね ころ

右

新うく玉や毛虫か
右 第 本 の ころ

計りし水うい
ゆりし趣向
や共しき
才十四

左

古くはや何れも人子
大 杞

右 勝

新新の
方子
くめ
うり

才十五

左

里芋の長うり畠中おはす可くやうんハ

右勝

若くはくくくくしてを捨降す自然生

里芋無きて宜なりぬの山の裏自然生は顔生の字ありぬ

んていへくくくや但自然生不木の類もくくく

すきくく上と文字力ありて一白くくくくく

才十六

右勝

系伝自身をくくく梅子の氣はくくく

右

乳酒の倍尺くくや袖一の青くく受

片の五文字え取重あつる現子くく梅子の精やくくに出じ
かの去大根を食くくくくくくくくくくくくくくくくく
いりくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
情の全うけくくくくくくくくくくくくくくくくくく
殊勝くくくくくく

才十七

左勝

暮山の雨松茸のすくくく

右

若くはくくく木くくくけけ耳子くく

くくくくく海苔山の向くぬれくくくくく
けくくくくくのぬりく味涼くくくくく

ゆきさねのまきとけの耳のあはれとてあまのまきとてきい
まきとてあまのまきとてあまのまきとてあまのまきとて

才十八

左 膝

もみくも密柑とを柑のあし日

右

水又粟こを清しととんたよれハ

柿を密柑令柑の論ハ柿の中と化さくあの中と実をかく
めり数るの中のも逃げ句におひし果園と心ゆんむ味ま
し多渡粟の句ハ粟よ水も清しとあまのまきとてあまのまきと
付れとも心路して空葉とてなまきとてあまのまきとてあまのまきと
たの句を以新ひまふ様と定年ぬ

才十九

左

ゆきさねのまきとけの耳のあはれとてあまのまきとてきい

右 膝

ゆきさねのまきとけの耳のあはれとてあまのまきとてきい

いささかもあまのまきとけの耳のあはれとてあまのまきとてきい
まきとてあまのまきとてあまのまきとてあまのまきとてあまのまきとて
の句とあまのまきとてあまのまきとてあまのまきとてあまのまきとて
あまのまきとてあまのまきとてあまのまきとてあまのまきとてあまのまきとて
尺三新しとてあまのまきとてあまのまきとてあまのまきとてあまのまきとて

才二十

左 膝

舟浪の音昆布はるるの夜すくくわめ

右

山すのち袖豆すくくわめ

たの白頭妻杉家の物さう起此布くそ以管をさるる
おそゆ傳しうを許の浪の方北きひしきまにさるる
さくしすしおひおひるる浪の白の袖豆すくくわめ
の風かすくくわめを能くしおひのちおひ

廿二十一

左 膝

本うぶしお風干はるるをさるるくくわめ

右

家やハ谷子りす房ハ埋木

き門の行湯の汗をさるる風の音さるるわめ
閑さおひおひるるさるる生力のぼんぼん

廿二十二

左 膝

ろくろくわねのむれはるるくくわめ

右

ゆけりのわおひるるくくわめ

あさるるのむれくくわめ
ゆけりらあさるるの白ねらるる白髪のおむれ
又あさるるむれくくわめ
ねねのおむれくくわめ

廿二十三

言
三
變一内にて新なる合にて其物の終りに其年二十五
此句合と云ふ予の好むふまににありたるや
一く尺にて遊ばし思ふに其の是を今に凡佛
且このれを其の學問を其の心を以て其の心を
もつて一情の因は因のけしむるも其の
其の學に麒麟を一つける是を其の心を以て其の
言の中は其の二月の西瓜の解の意入るをみよ
其のけしむるの紅を其のけしむるの紅を其の
きしむるの紅を其のけしむるの紅を其の
其のけしむるの紅を其のけしむるの紅を其の
新に其のけしむるの紅を其のけしむるの紅を其の
けしむるの紅を其のけしむるの紅を其の

かきみ瓜

于時定實八原申季秋日

華桃園

蹟の原

判者四人

春 夏 秋 冬

素堂 調和 湖春 桃青

四季之句合

撰者

不卜 才丸 其角

一書

左 拈

落葉

落つるぬ木葉をうりぬらうる葉のれ

風水

右

落葉とてふ士の法やう塔の心

松林

たのむ事全微細や雲をけしう右又山をゆるとり不
この縁の二のうけとゆとるやうにけしきとよと
尺のう切字の 又文字うしと跡 一はれまきれ ちを加
尺のうふと和程多のうとる紙紙 一と拈り定 竹之末

二書

左 勝

雪の

親しき子に雪の初をかろふ時をうらな

流石

左 杉 洞代

子もまきこ 杉のしりしり 羨ましく 心水

右

ゆらゆらのゆらふやま ぬくわうん 不角

あしらのたす子をまきこる ぬきめりしり ちやう

ぬ又ゆらゆらの枝のゆらゆらとまきこる ぬきめりしり ちやう

はなはなぬきめりしり

六 留

左 藤 石景

ゆらゆらぬきめりしり ぬきめりしり 洞 柳

右

はなはなぬきめりしり ぬきめりしり ちやう

たのむゆらゆらぬきめりしり ぬきめりしり ちやう
をのゆらゆらぬきめりしり ぬきめりしり ちやう
たのむゆらゆらぬきめりしり ぬきめりしり ちやう

七 留

左 藤 鴨

ゆらゆらぬきめりしり ぬきめりしり ちやう

右

ゆらゆらぬきめりしり ぬきめりしり ちやう

すうゆらぬきめりしり ぬきめりしり ちやう
ゆらゆらぬきめりしり ぬきめりしり ちやう
ゆらゆらぬきめりしり ぬきめりしり ちやう
ゆらゆらぬきめりしり ぬきめりしり ちやう

八番 舟の細さしとわん

左 水柱 さうし 柳の 一筋

右 門開の 玉尾さし 柳の 水柱 柳の 舟

舟の細さしとわん 舟の細さしとわん 舟の細さしとわん 舟の細さしとわん 舟の細さしとわん 舟の細さしとわん 舟の細さしとわん 舟の細さしとわん 舟の細さしとわん 舟の細さしとわん

左 舟の細さしとわん 舟の細さしとわん 舟の細さしとわん 舟の細さしとわん 舟の細さしとわん 舟の細さしとわん 舟の細さしとわん 舟の細さしとわん 舟の細さしとわん 舟の細さしとわん

右

舟の細さしとわん 舟の細さしとわん 舟の細さしとわん 舟の細さしとわん 舟の細さしとわん 舟の細さしとわん 舟の細さしとわん 舟の細さしとわん 舟の細さしとわん 舟の細さしとわん

十番

左 舟の細さしとわん

舟の細さしとわん 舟の細さしとわん 舟の細さしとわん 舟の細さしとわん 舟の細さしとわん 舟の細さしとわん 舟の細さしとわん 舟の細さしとわん 舟の細さしとわん 舟の細さしとわん

右

舟の細さしとわん 舟の細さしとわん 舟の細さしとわん 舟の細さしとわん 舟の細さしとわん 舟の細さしとわん 舟の細さしとわん 舟の細さしとわん 舟の細さしとわん 舟の細さしとわん

右の白くさき影のぬくき... 右に尺の...
右に陣のまゆ... 文の... 右に陣のまゆ...
右に陣のまゆ... 文の... 右に陣のまゆ...

十一番

右勝 取中

山里の白くさき影のぬくき... 右に尺の...
右に陣のまゆ... 文の... 右に陣のまゆ...

右

山中の白くさき影のぬくき... 右に尺の...
右に陣のまゆ... 文の... 右に陣のまゆ...
右に陣のまゆ... 文の... 右に陣のまゆ...

十二番

左 煤掃

山中の白くさき影のぬくき... 右に尺の...
右に陣のまゆ... 文の... 右に陣のまゆ...

右勝

山中の白くさき影のぬくき... 右に尺の...
右に陣のまゆ... 文の... 右に陣のまゆ...
右に陣のまゆ... 文の... 右に陣のまゆ...

山中の白くさき影のぬくき... 右に尺の...
右に陣のまゆ... 文の... 右に陣のまゆ...
右に陣のまゆ... 文の... 右に陣のまゆ...

年々是れも先も集めたる...
 とも喜秋巻く...
 さいふの無く...
 ありし心...
 色こと本...
 ありお士...
 樂子え...
 とも喜...
 といふ...
 とも喜...
 とも喜...



